

黒上正一郎 著

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』輪読のために

九州造形短期大学教授  
国民文化研究会副理事長

小柳陽太郎

(一) 輪読の意義

(イ) 輪……「相共に賢愚なることみまがなの端なきがごとし」(憲法十七條、第十條) 「輪」はお互ひが人間の眞実に帰らうとする努力の中に生れる。

(ロ) 読……大言海「よむ」の項、(一)物ヲ数フルゴトクツブツブニ唱フ、声立テテ唱フ (二)定マリテアル詞ヲ今マネビテ口と言フ (三)講ズ (四)解ス、サトル、了解ス  
心を空しくして古典に接し、それを声に出して唱へることによって古典の中にこめられた先人のおもひを偲ぶ。  
(概念的理解とのちがひ 和を以て貴しとなす—憲法十七條、第一條)

(二) 著者黒上正一郎先生(昭和五年九月逝去、三十歳)について

(三) 輪読箇所(序説一頁より四頁八行目まで)についての説明及び輪読

※「この文化を把握する我が国民は……世界的使命を負ふものである」

——「民族的優越感」とのちがひ——

※「かくの如き指導的人格を……皇室に仰ぎまつたのである」

——所謂「皇国史観」とのちがひ——

※我々はいまどういふ時代に生きてゐるか。

- (一) 古代(〜6C)
- (二) 大陸文化流入以後(6C〜18C)
- (三) 西洋文化流入以後(19C〜)

(四) 日本歴史における聖徳太子の御存在の意義

——数々の古典の中から何故太子の文章をとりあげるのか。——

以上の輪読箇所ではその全容が明らかにされたと思ふが、さらに次の小林秀雄先生のお言葉をははつてみたい。

「聖徳太子は、日本最初の思想家だ。太子が書かれた『義疏』といふ本は、外圧をじつと耐へて爆発するやうに日本人があらはれたといふものだ。太子を外国文化の影響に染つた人、といふ人たちがあつたが、そんなものではない。あつた人は本当の日本人だ。自分が犠牲になつて、歴史を作つたんです。だから、日本人はみんな太子を崇めてゐるんです。太子の苦しみが日本人にはわかるのです。それでなくてどうしてあんなに皆が太子を思いますか。」

(小田村寅二郎「二十年余の御縁をいただいて」)

※ 「設身たごに苦有りと悪趣の衆生を念じて大悲心を起す」(維摩經、文殊問疾品)

——大士は其の身の苦を忘れて苦を同じうして化することを明かすなり。此の句は悲能く苦を抜くことを明かす——

(維摩經義疏)

(五) 終りに——再び輪読について

白洲正子さんは「『美』を見る眼」といふ文章の中で小林秀雄先生は相手は骨董でも文学でも絵画でも「沈黙したものを対象に、無理に口を開かせようとはせず、我慢に我慢を重ねてつき合った後、向うが自然に秘密を明かす時まで待つ」人であったと言つてをられるが、輪読の心構へはすべてこのことばの中にこめられてゐると思ふ。心をこめて読んでゆくと、概念的に理解してゐたのが恥しくなる時がくる。そして躍動するやうな世界が開けてくる。そのよろこびを是非体験していただきたい。それは学問の一つの方法ではない。学問の出発点そのものなのである。

「冊子を披繙すれば嘉言林の如く躍々として人に迫る」(吉田松陰「士規七則」)